

高田三郎先生のこと

本 田 盛

「水のいのち」や「心の四季」など合唱曲を中心に数多くの作品を残し、2000年に86歳で亡くなられた高田三郎先生は、日本の代表的な作曲家のひとりとして活躍された一方で、教会音楽をライフワークとされていた。讃美歌21にもいくつか収録されているが、先生が作曲された教会音楽は200曲をこえる。

先生はご自身の教会音楽を録音として数多く残されている。私は学生時代、同じ教会に所属していたこともあり、高田先生に声をかけていただいて、合唱メンバーとしてレコーディングに2度ほど参加したことがある。本番は先生が指揮をされて丸一日がかりで行われたが、毎回本番に先立って合宿と称した総合練習があり、高田先生が直接合唱指導をされた。

うまくできないと烈火のごとく怒り出す高田先生の指導はつとに有名だったが、これは先生の音楽に対する思いと情熱の表れだったのであろう。合宿や本番前のリハーサルでは、怒鳴られながらも実に多くのことを教えていただいた。つねに口にされていたのは、教会で歌う音楽は言葉を伝えることが目的なのだとということであった。それまで日本の教会音楽は欧米の歌詞を翻訳したものが主流であり、言葉を伝えるというよりメロディーがなじみ深いということで歌われていたものが大半であった。日本語で歌われる教会音楽には、日本語のために作曲された音楽が必要なのだと高田先生は力説されていた。

高田先生の楽譜には八分音符、付点音符、休符がならぶ。それを見ただけでも、まさに日本語の発音やリズムが音楽のかたちで表現されていることがわかる。先生はあくまでも日本語を豊かに伝えるための教会音楽をつくろうとしたのである。

先生は発音、アクセント、フレージングにはとくに厳しかった。音楽は日本語を伝える一方で、日本語も音楽によって規定されることがあるという。たとえば、高田先生の詩編唱和では詩編の句や文全体に全音符が一つつけられていることが多い。あまり意識していないと、全音符が一つあるだけなのでこれらを適当な長さや早さで歌ってしまう。すると一喝、「何のために全音符がついているんだ！音の長さを考えろ」と。

今となっては遠い過去の思い出だが、体にしっかりと刻まれた思い出である。

(総合政策学部教授)